

〔連携研究会報告〕

2007年度の日本マレー世界研究会（JA'AM）の活動について

西 芳実

「日本マレー世界研究会」（JA'AM ; Japan Association for Alam Melayu Studies）も発足より2年が経過しようとしております。この間、研究会でご報告をいただきました方々にご参加いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。

2007年度は、定期的出席者の多くが博士論文の最終段階をむかえられたこともあり、活動の重点を読書会から研究会へ移し、主に博士論文の構想やその成果をご報告いただきました。また、新たな参加者もあり、マレーシア、インドネシアに加えて、タイについてもご報告いただくなど、カバーする地域やテーマも一層多彩となりました。そうしたことから、出席者の多少に関わらず、充実した報告がなされ、さらにそれに呼応して熱のこもった論議が展開されることが多かったように思います。

もうひとつの特筆すべき点は、JAMS 関東地区委員弘末先生のご協力により、JAMS 関東地区研究会と共催の研究会を開催できたことでしょう。弘末先生並びに共催の研究会にご出席いただきました皆様に対し、この場を借りて心より感謝申し上げます。

なお、JA'AM は研究分野や対象とする時代を問いません。様々な専門や関心を持つ人々が集まり、新たなマレーシア・インドネシア像を求めて参加者同士で活発な議論を行うことをめざしております。無論、年齢その他の制限もありません。常勤の職の有無を問わず研究者として対等にやりとりできる場となることを志向しております。

最近、JAMS に新しく入会された方の中に、JAMSML を通じて JA'AM の存在を知り、参加しやすい研究会として参加される方も出てまいりましたが、JA'AM は JAMS 会員諸氏のご参加を心より歓迎しております。

ちなみに、2007年6月以降のJA'AMの活動は以下の通りです。なお、JA'AMでのご報告の際に報告要旨を提出していただく必要はありませんが、ご提出いただきましたものは下記に掲載させていただきます。

(1) 研究会の会場および日時

東京大学駒場キャンパス 9号館または 18号館。原則として金曜日の午後6時過ぎから行ないませんが、その案内は JAMS メーリングリストを通して通知いたしております。

(2) 2007年度の研究会

・2007年6月29日

西芳実（東京大学）

「「独立」を志向しない脱植民地化——スマトラ沖地震・津波後のアチェ紛争和解過程を見る視角」

・2007年7月13日

梶沢英雄（東京外国語大学大学院博士後期課程修了）

「インドネシア・ナショナリズムの思想——インドネシア・ネーションとは何か」

・2007年10月5日

鈴木絢女（東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻・日本学術振興会特別研究員）

「マレーシアの自由と民主主義——政治的権利を制限する立法をめぐる政治過程の研究」

概要：本研究は、政治的権利を制限する法をめぐる政治過程（立法・実施）に焦点を当て、マレーシアの政治体制の内容と成立要因を明らかにすることを目的としています。結論として、（1）自由競争を制限することにより、異質な主体間の対立のレベルを抑えつつ、多様な主体の参加を実現する、（2）明文化されたルールにより、政府、与党も含めた全ての主体の行動を規律する、という特徴を指摘し、これを比較政治体制論の観点から解釈します。

・2007年10月26日

光成歩（東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻修士課程）

「現代マレーシアにおける棄教問題——Lina Joy 裁判の論争化過程の分析」

概要：2005年以降、マレーシアでは Lina Joy というマレー人女性のイスラーム棄教が社会的な論争を呼び起こしている。この“棄教問題”を、マレーシアの政治・社会的な文脈と、司法制度に位置づけて分析し、問題の現代性を析出する。

・2007年11月24日（JAMS 関東地区研究会と共催）

立教大学 太刀川記念館1階 第1・2会議室

報告1：西芳実（東京大学）

「ダウド・ブルエとインドネシア共和国独立闘争——脱植民地化期アチェにおけるイスラーム教指導者の役割」

報告2：山本博之（京都大学）

「マレーシアの建国過程におけるプラナカンの役割——サバのマレーシア参加の事例から」

・2007年12月14日

片岡樹（目白大学等非常勤講師）

「シヤム領「海峡植民地」のパバ文化——プーケット福建人社会の土地公・会党・「マレーシア文化」」

概要：本報告は、プーケットの中国系住民の事例から、タイ・マレーシア境界領域におけるローカルな文化の動態を検討するものである。現在の華僑・華人研究には大きく分けて二つの潮流がある。ひとつは、「中国人から華人系現地国民へ」という、ナショナルな帰属に関心を収斂させるアプローチであり、もうひとつは、国家の枠を越えた中国系住民の移動ネットワークに着目することで、文化的アイデンティティを土地への帰属から切り離すアプローチである。こうした議論の分極化から抜け落ちてくるのが、プレ・ナショナルな、あるいはローカルな帰属意識のあり方への視野である。この欠落を補うべく、本報告では、南タイ・プーケットのパバ社会における土地公祭祀（本頭公、大伯公、福德正神、ダト公等と呼ばれる）に着目する。これら土地公祭祀が、旧海峡植民地から移住してきた彼らの歴史をどう反映しているのか、土地公をめぐる表出される民族意識とはどのようなものであるのかを考察し、最後に、近年のパバ文化再評価運動の中で土地公がどのような位置づけにあるのかを検討する。

・2008年1月18日

西尾寛治（防衛大学校）

「ヒカヤットにおける人間集団の分類に関連した諸概念」